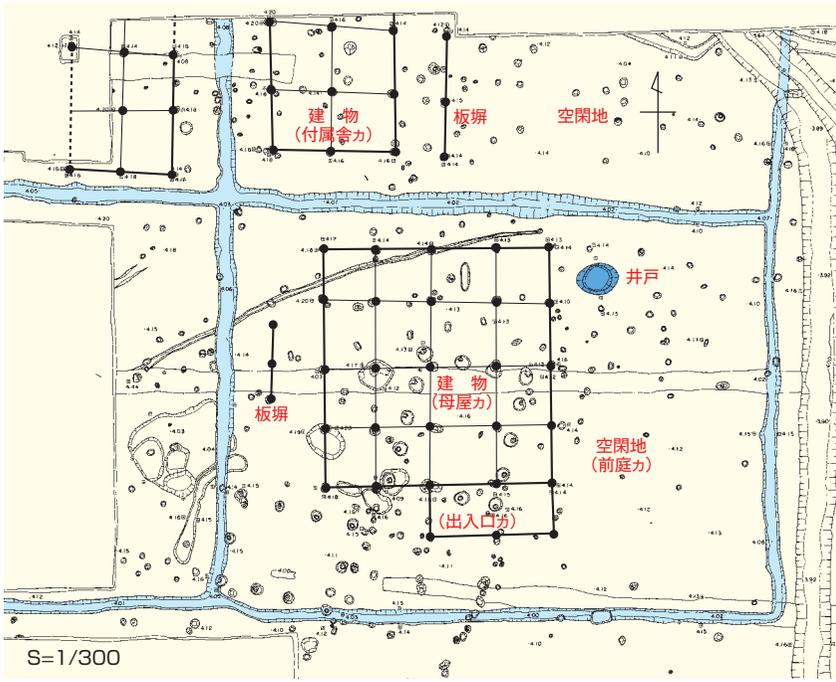


莊園の村里と武士の館

むら
の
むら



鎌倉時代の宅地図(佐々木ノテウラ遺跡) 能美荘内で発見された自作農クラスの宅地は、方形に区画された敷地(面積約100坪)に母屋、井戸、前庭などが配置されていた。

鎌倉に幕府が開かれ能美郡の武士達と、加賀の政治拠点であった国衙の館には、国司の代官などが赴任し、公領や莊園の村里を支配していた。その国衙に程近い梯川の流域では、農村の風景が広がり、板葺きの建物からなる村里や武士の館(屋形)が、田畠の中に散在していた。佐々木ノテウラ遺跡の宅地



大型建物の発掘(三谷大谷遺跡) 平地が少ない木場瀧の東岸では、鎌倉時代の開発領主クラスの大型建物(6間×5間)は丘陵の谷間に設営されていた。

は、得橋郷の条理区画に沿った家並みで、中規模の建物や井戸からして自作農の居宅とみられる。



白江の堀割と宅地(白江梯川遺跡) 白江町の遺跡からは、幅2.5mの堀跡や一辺約60m規模の居宅が発掘され、在地領主の館と職人が暮らす町場の営みが知られた。

近隣の軽海郷や能美荘においても、小規模な中世村落が多く、加賀の農村においては、名主や小百姓の人々は、数軒の規模で村や里を形成していた。他方、丘陵の谷間に位置する三谷大谷遺跡では、間口六間の大型建物と附

属の建物が営まれていた。鎌倉時代に農業用水が得やすい谷戸を開発した有力者は、集落から離れた耕作地の一角に大型住居を単独で構えることで、家族や使用人と暮らしていた。南北朝時代の頃から、荘園の代官

や有力名主であった武士の館に堀割が設けられる。堀割の規模は白江梯川遺跡で幅二・五畝、佐々木アサバタケ遺跡では幅二畝と違いがあり、その規模は経済力や権力が反映した防御施設とみられている。白江梯川遺跡は、能美郡で最大の中世村落で、白江氏の居館とみられる東西約六〇畝の宅地を中心に、多くの家屋が営まれていた。川舟が停泊した岸辺には、小型の建物や作業



多太神社近くの町場(幸町遺跡) 北陸道が通過する上本折町から幸町に広がる遺跡で、戦国時代に鍛冶職人などが活動した町場とみられている。

小屋が集まり、下駄や曲物などの木工職人のほか、織物や醸造業者の活動がみられる町場が広がり、白山信仰の御正体を祀る祠も置かれていた。戦国期、本折の多太神社の近くでは、小鍛冶や絹生産の職人が活動した町場の形成が進み、本折三日市と呼ばれていた。

(垣内光次郎)

(写真は石川県埋蔵文化財センター提供)